1987 年から 20 年間に日中笹川医学奨学金で来日した 中国人医療従事者についての分析 — 中国口腔科医師の受け入れ状況を中心に —

森 昌彦・住友伸一郎・太田 貴久・式守 道夫

Analysis of Chinese health workers learning in Japan for 20 years since 1987 by the Sasagawa Medical Fund — Focus on acceptance of Chinese stomatologists —

MORI Masahiko · SUMITOMO Shinichiro · OHTA Takahisa · SHIKIMORI Michio

Abstract: The present paper analyzed Chinese medical staff (including stomatologists, pharmacists, and nurses), comprising a total 1782 persons who visited Japan from 1987 through 2006 and were sponsored by the Sasagawa Medical Fellowship. Chinese stomatologists accounted for 88 persons among the total of 1782. Among the 88 stomatologists, 15 were from the 4th Military Medical University, 9 from Jilin University, 8 from Beijing University, and 6 from China Medical University; a total of 25 were from North East China. The departments of Japanese universities attended by Chinese stomatologists included 17 departments of in periodontology and conservative dentistry, 16 departments of oral surgery, 12 departments of prosthetics, 11 departments of orthodontics, and 8 departments of pedodontics at dental and medical schools. Stomatologists who had learned major specialties in Chinese stomatological colleges also majored in similar specialties at the Japanese universities or hospitals.

Chinese administrators have been investigating Japanese health science systems, including not only medical technology and clinical medicine, but also several administrative specialties such as medical law, public health, prevention of infection diseases, cancer, population research, and budgets from both research and clinical perspectives.

Medical staff from central administration in the Government of China have also learned considerably from his or her experience during investigations in Japan. No administration staff of stomatologists were supported by the Sasagawa Fund.

Key words: Chinese stomatologist (中国人口腔科医師), Japanese acceptance (日本の受入先), Japan-China Medical Association (日中医学協会), Japan-China Sasagawa Medical Fellowship (日中笹川医学奨学金制度)

緒 言

中国の口腔医学は日本の歯科とは違った体系の下に発展してきた。それらの実態について本誌に3編に分けて発表した^{1~3)}。この近代化の1つの要因として財団法人日中医学協会笹川医学奨学金制度がある。日中医学協会は1985年に設立され、笹川医学奨学金制度によって1987年に第1期生を迎えて以来2011年までに合計2,158名の中国人研究者をわが国に迎えた。この財団は日中両国の保健医療の向上

を目的として医学、歯学、薬学および看護学の医療分野における両国関係者の相互交流と学術上の協力を推進した。さらにこの制度を利用して来日した研究者の多くが中国に帰国後、主要大学の学長や病院長、主任教授に就任し、なかでも、2名が中国科学アカデミー会員(日本の学士院会員に相当)に選ばれるなど、中国医学・医療分野で中心的な役割を担っている。

中国人の医療関係者の来日は都道府県、各大学の姉妹校関係、その他さまざまな公的、私的な法人や財団からの援助により実施されているが、その全体像は詳らかでない。中国の医科大学、医学院および総合病院は中国衛生部(日本の厚生労働省に相当する)か各省の衛生部が管理し、それらはすべて中国共産党の管理下にあり、衛生部の事務職員は医師等の有資格者である。中国衛生部は自国の医療の質を上げるために衛生管理者を日本の大学や関係機関に送

朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野
(主任:式守道夫教授)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Division of Oral Pathogenesis and Disease Control, Asahi University School of Dentistry (Chief: Prof. SHIKIMORI Michio)

受付日: 2011年11月14日

採択日: 2012年3月27日

り込んでおり、わが国の医療について、技術レベル、教育体系および管理運営体制の実態を熟知し得たと考えられる。

本論文では日中医学協会の援助により1987年から2006年に至る20年間に来日した、中国の医療関係者について調査し、特に口腔科医師については、個々に中国のどの大学から日本のどの大学（講座）に留学したかについても調査した。

日中笹川医学奨学金制度設立までの沿革^{4~7)}

1972年、当時衆議院議員であった宇都宮徳馬氏を中心とする日中友好協会が中華医学会との間に医学交流を開始した。1978年には、日中友好協会に医学交流委員会ができ、これがもとで任意団体である日中医学協会を設立し中華医学会と交流が深まった。1980年には日本医師会、日本医学会、日本歯科医師会、日本歯科医学会、日本薬剤師会、日本薬学会および日本看護協会の賛同により財団法人化された。

歯科関係の両国の交流は1983年に日本歯科医療開発研究会の丸山茂氏（東京）が訪中し、その後、日本歯科医学訪中団を派遣し協力関係が始まった。

1985年9月に財団法人日中医学協会が設立し、会長に黒川利雄氏、副会長に石館守三氏が就任した。

1986年8月14日、中国衛生部副部長 陳敏章氏、財団法人日中医学協会会長 石館守三氏および財団法人笹川記念保健協力財団会長 笹川良一氏の三氏が「笹川医学奨学金制度協定書」に調印し、これにより10年間で1,000名の中国人研究者を招聘する研究助成事業が開始された。1987年には第1回生が来日し、その後1年を2期に分け約50名ずつが来日した。初回の受入れセレモニーに総理大臣であった中曽根康弘氏が出席し、日本学術振興会の助成として日中医学協力事業も開始され、日中医学交流会議もこれ以後毎年開催されている。1988年2月21日に当時理事長であった黒川利雄氏が91歳で永眠され、その後、石館守三氏が理事長と会長を兼務し、1992年から名誉会長に就任した。

1991年には笹川医学奨学金研修生同窓会が設立された。北京国際医療中心理事長 趙同彬氏が顧問となり、中国衛生部と協力し財団の財政援助により笹川生通丸を発行し、学術交流が行われている。1992年には日中医学大会1992が北京で開催された。同年から特別研究者招聘事業が開始され、1996年までの5年間、毎年10名を招くこととなった。1995年には日中医学協会の財団法人として設立10年目を記念した事業・シンポジウムを実施した。1996年、笹川医学奨学金制度継続の協定書が調印された。また、日中医学協会は笹川医学奨学金とは別に日本財団から資金供給を受け共同研究助成事業の補助金を交付した。2000年には設立15周年記念シンポジウム「西洋医学と伝統医学」が開催

された。2005年には財団設立20周年記念シンポジウム「日中両国における感染症の現状と対策—インフルエンザとエイズを中心に」が開催された。さらに2007年には笹川医学奨学金制度20周年記念式典が北京で開催され、この制度のさらなる継続が調印された。

日中笹川医学奨学研究生の選考

年間100名近い来日者の選考は中国衛生部が行い決定した。衛生部直属の国家医学試験センターにより、広い中国の全土で行われている。この試験を全国衛生系統外国語水平考試 State Foreign Languages Proficiency Test for Medical Staff と呼び、これに合格した者1,000名程度から地方衛生庁、中国衛生部の選考を経て留学者が決定される。現在では日本の高等教育の情報をインターネット等で入手することが容易となり、中国人の日本における研修機関の決定について自分で選別ができるようになってきた。そのため高度の研究成果を出している日本の大学の講座に希望者が集まるようになった。来日前8か月の語学研修期間を1992年から5か月に短縮し、英語と日本語を2か月半ずつ実施するようになった。

日中笹川医学奨学金制度による来日者について

財団法人日中医学協会の第1期から第30期の奨学金制度により1987年から2006年の20年間に来日した中国人研究者は1,782名であり、その名簿から中国の出身大学・機関、受け入れた日本の大学講座あるいは指導責任者を調査した。調査に際し中国人研究者の氏名は非公開とした。財団の主な目的としているわが国の医学、歯学、薬学、看護学の4分野に分けて調査した。

現在の中国の医療従事者には日本やアメリカ等と言う歯科医師（dentist）はなく、すべて医師に分類される。中国の大学または高等教育研究機関の職種は教授、準（副）教授、講師、主任、副主任、主治医師、住院医师、助理または研究員、主任科員、助教等である。薬剤師は薬師、看護師は護師と呼ばれ、これらの場合も医師と同じで頭に主任等をつけ、例えば主任薬師という。

1987年から1996年の前半10年間は年2回、各々およそ50名が来日し、合計1,000名が来日した。後半の10年は年間70～80名が来日し、その合計は782名であった。この20年間1,782名のうち口腔科医師は85名、薬学関係者は100名、看護関係者は44名であった（表1）。

今回の調査では日本の薬学部に来日した中国人を薬学関係者に分類した。薬学関係者の出身機関は、医科大学、医学院、中医学院、中医院、中医薬院あるいは中薬院と広い

機関におよび、医師または薬師の資格をもっており、必ずしも中国の薬学関係機関の出身者ではなかった。さらに、上記の中医薬院・中薬院を卒業した中医専攻者も含まれていた。

看護関係者の来日においても護師以外に各段階の医師の資格をもった研究・教育者があり、この場合も看護関係機関に受け入れられた者すなわち、看護関係として分類した。

日中笹川医学奨学金制度により来日した 口腔医学関係者の分析

今回の報告では日中笹川医学奨学金制度による中国人来日者のうち口腔科医師について、彼らの出身および受入れ大学、学科名または講座名等について、詳細に調査した。

表 1 日中笹川医学奨学金制度による来日中国人研究者の内訳

年 度	来日総数	口腔科医師	薬学関係	看護関係
1987～1991	1,000	25	39	5
1992～1996		17	36	16
1997～2006	782	46	25	23
合 計	1,782	88	100	44

1. 来日中国人口腔科医師を送り出した中国の大学、機関

第1期から第30期の日中笹川医学奨学金制度で来日した口腔科医師 88 名のうち、最も多くの中国人を日本に送り出した大学は中国人民解放軍第四軍医大学口腔医学院（以下、第四軍医大と略す）で 15 名、次が吉林大学口腔医学院（旧白求恩医科大学）の 9 名、北京大学口腔医学院の 8 名、中国医科大学口腔医学院の 6 名、四川大学華西口腔医学院の 4 名、以下 3 名の大学 3 校、2 名の大学 5 校、1 名の大学・病院等が 27 機関であった。詳細を表 2 に記載した。

2. 来日中国人口腔科医師の講座別受け入れ人数

最も沢山の中国人研究者を受け入れた講座は保存科関連講座が 17 名、次いで口腔外科が 16 名、補綴科（12 名）であり、その後に中国で遅れていた矯正歯科、小児歯科の順であった（表 3）。

3. 来日中国人口腔科医師の内訳

口腔科医師の来日時の年齢、来日前の中国の大学等の所属と地位、日本の受入れ先を表 4 に示す。1980 年代の後期（第 1～4 期）までの来日中国人には 40 歳代が含まれており、彼らは現在定年退職している。それ以後の奨学生の大半は 30 代で、帰国後に中国の医療の発展に貢献している。中国の口腔科医師の受入れ先の講座はほとんどが中国の大学の専門分野と同じであった。また来日した中国人口腔科

表 2 来日中国人口腔科医師を送り出した中国の大学、機関

機 関 名			送出人数
第四軍医大学口腔医学院			15
吉林大学口腔医学院（旧 白求恩医科大学口腔医学院）			9
北京大学口腔医学院（旧 北京医科大学、北京口腔医学院）			8
中国医科大学口腔医学院			6
四川大学華西口腔医学院（旧 華西医科大学口腔医学院）			4
首都医科大学口腔医学院	佳木斯医学院口腔医学院	哈尔滨医科大学口腔医学院	3
中山大学口腔医学院	河北医学院	河南医科大学	2
天津市口腔医院	南京医科大学		
上海第二医科大学口腔医学院	天津口腔医学院	武汉大学口腔医学院	1
同济大学口腔医学院	延边医学院	錦州医学院	
山東医科大学	重慶医科大学	浙江医科大学	
安徽医科大学	寧夏医学院	瀘州医学院	
昆明医学院	南方医科大学	北京協和病院	
北京鐵路総医院	上海華東医院	吉林省人民医院	
浙江省人民医院	黒竜江省医院	江蘇省口腔医院	
中国人民解放军総医院	中国人民解放军総後勤部衛生部	人民解放軍瀋陽軍総医院	
人民解放軍広州軍広州総医院	人民解放軍成都軍総医院	中日友好病院	

表3 来日中国人口腔科医師の講座別受け入れ人数

講 座 名	受入人数
保存・歯周病・歯髄生物学	17
口腔外科*1	16
補綴科	12
矯正歯科・咬合機能制御学	11
小児歯科	8
予防歯科 解剖・口腔解剖 細菌学	3
口腔病理 生理学	2
形成外科 口腔治療学 総合診療科	1
口腔生化学 分子生物学 がん研究所*2	
再生研*3 歯科理工学 放射線科	
分子免疫学 医用機材研究所	

*1：医学部と歯学部を含む

*2：国立がんセンター

*3：京都大学再生医学研究所

表4 来日中国人口腔科医の出身母体での地位

資 格	人 数
副 教 授	2
講 師	11
医 師	19
主 治 医 師	38
主 任 医 師	1
副主任医師	8
住 院 医 師	5
助 教	2
主 管 技 師	1
編 集	1
計	88
性 別	人 数
男 性	51
女 性	37

医師の来日前の地位について表4に示した。大学等の地位で「医師」とあるのは主治医師のことと考えられるが、もしそうであるとしたら主治医師の総数が57名となり、合計88名の過半数を占めることになる。

4. 中国人口腔科医師を引き受けた日本の大学の講座

最も多くの中国人研究者を受け入れたのは東京医科歯科大学で総計19名を数えるが、この人数の増加は最近のことである。これに続いて大阪大学歯学部は10名、東京歯科大学と昭和大学歯学部はともに8名、大阪歯科大学5名と続く。ほとんどすべての大学歯学部が、この20年間に中国人研究者を引き受けていることが分かる(表5)。日中笹川医学奨学金制度により2名以上の研究者を受入れた主任教授と講座を表6に示す。

20年間に来日した中国人研究・管理者の出身機関と受け入れた日本の大学以外の機関名

来日中国人は大多数が大学の基礎医学部と付属医院(病院)の勤務者であった。大学以外に中国の国、省、市の機関の管理者として次のものがある。これらを中国の政府機関(国立)、地方自治体の機関(省立)、市、医院(病院)、中国人民解放軍、紅十字会関係に分け表示した(表7-1)。

以上のことから日中笹川医学奨学金により来日した中国の医学、医療従事者は中国政府、中国の大学、省、市等の医療管理全般に及んでいることが分かる。中国の医療管理者は日本の大学以外のどのような機関、病院に留学したかについて調査した結果を示す(表7-2)。

考 察

1. 中国の国家の決めた医療技術者

中国の医療技術者は医師、薬師と護師の3つの職種を基として成り立っている。古い伝統的な医療を保存するため医師の資格のなかに戦後の西洋医学を学んだ医師以外に中医がある。この中医は中医学院または中医学部、中医薬学部または中医薬院と中薬院の卒業生でありすべて医師である。口腔科医師は医師の範疇に入り日本で言う歯科医師という資格はない。20年間に来日した合計1,782名の中国人医療関係者のうち中医は日本の医学部の内科を主とする診療部門に留学するか医学部基礎の薬理学講座または薬学に留学しており、外科系の講座に留学した者はいなかった。口腔医学を専攻した者も一部を除き日本の大学歯学部の各講座か医学部の口腔外科学講座に留学していた。その関係は来日前の中国の大学の所属と、来日後の日本における大学等の所属部署とはほぼ一致していた。中国の口腔科医師で管理職の者はいなかった。

2. 来日中国人医師・薬師を送り出した中国の大学

口腔医学院の例をみても明らかなのは西安の第四軍医大で口腔科医師88名中15名を送り出している。吉林大学(旧白求恩医科大学)は9名、中国医科大学は6名、佳木斯医科大学と哈尔滨医科大学はともに3名、延辺医学院、吉林省人民病院、瀋陽軍総医院、および黒竜江省医院は各1名で、これはいずれも中国東北三省にあり、合計25名を送り出している。これらの東北三省の医科大学にはかつて日本語で学んだ教授が多く、第四軍医大の基礎系にも日本語

表5 中国人口腔科医を受け入れた日本の大学、講座名

機関名	(受入人数) 講 座					
北海道大学歯学部	(1) 生化学					
岩手医科大学歯学部	(1) 補綴科					
明海大学歯学部	(1) 保存科	(1) 歯周病科				
日本大学松戸歯学部	(1) 生理学					
東京医科歯科大学	(5) 矯正歯科・咬合機能制御学	(4) 歯髄生物学	(2) 歯周病科	(2) 口腔外科		
	(2) 小児歯科	(1) 保存科	(1) 補綴科	(1) 放射線科	(1) 医用機材研究所	
東京歯科大学	(2) 補綴科	(2) 小児歯科	(1) 歯科理工学	(1) 口腔病理学	(1) 保存科	
	(1) 口腔外科					
日本大学歯学部	(1) 補綴科					
鶴見大学歯学部	(2) 補綴科	(2) 口腔外科				
昭和大学歯学部	(2) 保存科	(2) 口腔外科	(2) 矯正歯科	(1) 補綴科	(1) 小児歯科	
順天堂大学医学部	(1) 形成外科					
国立がんセンター	(1)					
千葉大学医学部	(1) 口腔外科					
神奈川歯科大学	(1) 矯正歯科	(1) 口腔解剖学				
新潟大学歯学部	(1) 歯周病科	(1) 予防歯科	(1) 咬合機能制御学			
日本歯科大学新潟歯学部	(1) 保存科	(1) 補綴科	(1) 口腔外科	(1) 総合歯科		
名古屋大学医学部	(2) 口腔外科					
岐阜大学医学部	(1) 口腔外科					
朝日大学歯学部	(2) 口腔外科	(1) 歯周病科				
京都大学再生医学研究所	(1)					
大阪歯科大学	(2) 解剖学	(1) 生理学	(1) 口腔病理	(1) 小児歯科		
大阪大学歯学部	(3) 口腔細菌学	(2) 補綴科	(1) 矯正歯科	(1) 口腔治療学	(1) 予防歯科	
	(1) 分子免疫学	(1) 保存科				
岡山大学歯学部	(1) 矯正歯科					
広島大学歯学部	(2) 小児歯科					
高知医科大学	(1) 口腔外科					
九州大学歯学部	(1) 口腔外科	(1) 予防歯科				
福岡歯科大学	(1) 分子生物学					
長崎大学歯学部	(1) 補綴科					
鹿児島大学歯学部	(1) 保存科					

表6 2名以上の研究者を受け入れた主任教授と講座

主 任	講 座	受 入 れ			
金田 敏郎	(名古屋大学医学部歯科口腔外科学)	1期生(1987)	7期生(1990)		
道 健一	(昭和大学歯学部第1口腔外科学)	6期生(1989)	9期生(1991)		
森 昌彦	(朝日大学歯学部口腔外科学第1)	10期生(1991)	16期生(1994)		
瀬戸 皖一	(鶴見大学歯学部口腔外科学第1)	11期生(1992)	16期生(1994)		
長谷川 紘司	(昭和大学歯学部第3歯科保存学)	14期生(1993)	23期生(1999)		
浜田 茂幸	(大阪大学歯学部口腔細菌学・ 大学院歯学研究科分子病態口腔科学専攻 口腔分子感染制御学口腔細菌学)	16期生(1994)	18期生(1995)	23期生(1999)	
相馬 邦道	(東京医科歯科大学歯学部矯正歯科学第1・ 大学院医歯学総合研究科咬合機能制御学・ 咬合機能矯正学)	19期生(1996)	26期生(2002)	29期生(2005)	
黒田 敬之	(東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科顎顔面矯正学)	22期生(1998)	24期生(2000)		
三浦 一生	(広島大学歯学部小児歯科学)	23期生(1999)	23期生(1999)		
須田 英明	(東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科歯髄生物学)	24期生(2000)	26期生(2002)	29期生(2005)	30期生(2006)
石川 烈	(東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科歯周病学)	25期生(2001)	25期生(2001)		
薬師寺 仁	(東京歯科大学千葉病院小児歯科学)	25期生(2001)	27期生(2007)		
諏訪 文彦	(大阪歯科大学歯学部解剖学・ 大学院歯学研究科解剖学)	28期生(2004)	29期生(2005)		

表 7-1 日中笹川医学奨学金制度による来日中国人研究者の所属

中国の機関
A 中国の政府機関
中華人民共和国 衛生部（日本の厚生労働省）：国際交流中心
中国国際旅行社 生物製品研究所
中国中医研究院 鍼灸研究所 基礎理論研究所
中国衛生検疫総所
中国医学科学院 情報研究所 腫瘍研究所
中国薬品生物製品検定所
国家医薬管理局 薬物研究院
中国予防医学科学院
中国疾病予防控制中心 免疫規画中心
中国康復研究中心
中国福利会国際和平
婦幼保健院
針灸骨傷学院
護理学院
B 中国の省立機関（省の名称が頭につく）
省 衛生防疫幹部学院 站予防医学研究所
流行病防治研究所 等
省 中西医結合研究所
省 労働衛生職業病防治研究所
省 職工医学院
省 腫瘍防治研究所
省 薬品検驗所
省 寄生虫病防治研究所
省 計画生育科学技術研究所：計画生育委員会
省 婦幼保育所（院）
省 精神衛生研究所：精神衛生中心
省 皮膚病性病防治研究所
省 放射線衛生防護監督測所（甘肅省）
医学科学技術情報研究所（上海）
自治区婦幼保健院
C 市立の機関（市の名称が頭につく）
市 疾病予防控制中心
市 医用設備研究所
市 医学実験動物開発中心
D 医院（病院）
省、市の人民医院、工人医院（医院は総合病院）
専門科の医院：口腔医院、胸科医院、肺科医院、伝染病医院、
精神医院、婦産医院、婦嬰医院、児童医院、日中医院、
中日聯誼医院（吉林）
E 中国人民解放军関係
第一軍医大学
第二軍医大学
第三軍医大学
第四軍医大学
各地方军区総医院等
F 紅十字会中心関係

表 7-2 日中笹川医学奨学金制度による来日中国人研究者を受け入れた日本の機関（大学以外）

日本の機関
A 日本の国立機関
厚生労働省 薬務局
国立衛生試験所
国立予防衛生研究所
国立公害研究所
国立公衆衛生院
国立遺伝学研究所
国立長寿医療センター
国立成育医療センター
国立感染症センター
国立がんセンター
国立循環器病センター
国立医療病院管理研究所
国立健康栄養研究所
国立保健医療科学院
国立医薬品食品衛生研究所
国立精神神経センター
国立国際医療センター
国立身体障害者リハビリテーションセンター
放射線医学総合研究所
国立病院 労災病院 社会保険病院
国家公務員共済組合連合会病院 国立小児病院
B 日本の都府県立病院
東京都立駒込病院
県立がんセンター（栃木、愛知、静岡、千葉、九州）
成人病センター（大阪府立、滋賀県立）
秋田県立脳血管センター
こども病院（神奈川県立、静岡県立、長野県立）
大阪府立千里救命救急センター
兵庫県立東洋医学研究所
C 日本の財団法人
癌研究会
結核予防会結核研究所
東京都老人総合研究所
東京都医学研究機構
早期胃癌検査協会（中央病院）
東京都精神医学総合研究所
労働科学研究所
実験動物中央研究所
国際医学情報センター
日中医学協会
朝日生命成人病研究所
D 日本のその他の機関
日本赤十字社
聖路加国際病院
社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会
医療法人 澄心会豊橋ハートセンター
湘南鎌倉総合病院
小郡第一総合病院

で学んだ老教授が在籍していた。これらのことから日中笹川医学奨学金制度による試験（日本語）に合格した者が多く、したがって来日者も多いものと考えられた。一方、上海第二医科大学（現上海交通大学）の来日者が少ないのは、この大学はすでに欧米との結びつきが強く、欧米諸国への留学が可能であったため来日する必要度が低いと思われる。

3. 来日中国人の医療管理者

中国政府は日中医学交流に際し、単に医学の技術と医療制度の交流だけでなく日本の既存制度について大学教育のみならず国家の医療、防疫、薬品検査、公衆衛生、人口問題等全般にわたり調査していた。そのため表 7-1 に示した国家直属、省・市立の機関等から、特に国家直属の衛生部（日本の厚生労働省）からも専門事務官（医師等）が派遣されていた。中国の医科大学は中国衛生部に所属しているものが多く（他に教育部や省立のものがある）。この中枢管理部門から日本への派遣事務官は日本の政策予算等の内容について学んだものと思われる。先に述べたが中国の大学の弁公室の主任等はすべて医師、薬師で、日本の事務管理部門と比べると大きな違いがあることに注目すべきである。

結 論

1987 年から 2006 年の 20 年間に日中笹川医学奨学金制度により来日した中国の医療関係者（医師、薬師、護師）は合計 1,782 名で、これらのうち口腔科医師は 88 名であった。

この調査論文は次の事項について報告した。

1. 日中笹川医学奨学金制度による日中医学交流について。

2. 上記奨学金制度により来日した中国人口腔科医師（日本で言う歯科医師）88 名の来日前の所属、地位と、来日後の日本の大学等の所属機関名。

3. 上記奨学金制度により来日した中国人医師、薬師のうち、大学、病院等以外の国、地方省の管理部門の名称と日本の引き受け機関名を記した。

以上の実態を知ることにより、中国の医学全体または口

腔医療のなかで部分的に日本の様式が取り入れられていることが分かる。中国の医学院、口腔医学院の教育、研究者はほとんどすべて口腔科医師である。欧米の大学の基礎部門の教育、研究の従事者には医師、歯科医師の少ないことを考えた場合に大きな違いがある。

日中笹川医学奨学金制度二十周年記念誌が 2007 年 8 月中国衛生部から中国語と日本語で記された合体書として発行された。本論文には来日した中国人留学生全員の氏名、中国での所属、日本の指導責任者は記載しきれなかったが、これらの資料は、中国衛生部から公表されており、同時に詳細な現状調査結果も報告されている。

謝辞

本論文を完成するために資料を提供していただいた財団法人日中医学協会事務局長 比留間聡氏に感謝の意を表します。提供をうけた資料は日中笹川医学奨学金制度第 1 期から第 30 期までの研究者名簿、その他協会概要であり、財団法人の理事長から提供されたものであることをここに述べて謝辞といたします。

引 用 文 献

- 1) 森 昌彦, 住友伸一郎, 他: 口腔顎顔面外科・口腔病理学・口腔癌に関する国際誌投稿論文数と国際学会演題数からみた国際関係. 日口外誌 56: 636-644, 2010.
- 2) 森 昌彦, 住友伸一郎, 他: 第 12 回 ICOOC (国際口腔癌学会), 第 24 回 ICMFS (国際顎顔面外科学会) と第 19 回 ICOMS (国際口腔顎顔面外科学会) からみた中国の研究と臨床の現況. 日口外誌 57: 199-206, 2011.
- 3) 森 昌彦, 住友伸一郎, 他: 中国の口腔顎顔面外科の教科書 - 第二次世界大戦後から現代に至る教科書からみた教育体制と臨床技術について -. 日口外誌 57: 251-258, 2011.
- 4) 笹川陽平, 安達 勇: 人と人をつなぐ奨学金制度. 特集・日中笹川医学奨学金制度 20 年. 日中医学 24: 8-11, 2009.
- 5) 森岡恭彦: 日中笹川医学奨学金制度 20 年と将来. 特集・日中笹川医学奨学金制度 20 年. 日中医学 24: 4-7, 2009.
- 6) 趙同彬: 私の人生と日中笹川医学奨学金制度. 日中医学 24: 13-16, 2009.